

強度行動障害支援におけるプレパレーションの取り組みについて ～グループダイナミクスを活用して～

姫路市社会福祉事業団
姫路市立障害者支援センター
活動作業グループ（生活介護）
強度行動障害支援特化チーム
主任支援員 中川明美 三輪芳正 小林大介
支援員 小田健司
主任看護師 西本弥生

【はじめに】

姫路市立障害者支援センター（以下「当センター」という。）は、自立訓練、就労移行、就労継続支援 B 型、生活介護の多機能型事業所である。生活介護は平成 24 年 4 月、旧法の知的障害者通所更生施設から新体系サービス事業である生活介護へ移行し、看護師が配置となった。これまで、長らく支援員のみで支援が行われてきたが、利用者支援に看護師の視点が加わった。

当センターの生活介護では、45 名中 37 名（令和 4 年 4 月現在）が「重度障害者支援加算」（行動関連項目の行動障害の点数が 10 点以上の場合対象となる）の対象者であり、利用者全体の約 8 割を占めている。年々、激しい行動障害のある利用者が入所しており、彼らを受け入れるのが公立施設としての役割であると考えている。そのような状況の中で、強度行動障害がある方への日々の支援に、看護師ならではの視点が活かされている場面がたくさんあると感じている。強度行動障害支援における看護師の取り組みの一つであるプレパレーションについて、今回まとめてみたい。

【強度行動障害がある人の医療の現状】

強度行動障害のある利用者の家族から、本人を連れてなかなか病院を受診することができないという相談がよくある。待合室で待つことができない、大きな声を出す、暴れるなどの理由から、精神安定剤など定期的に処方してもらっている精神科のかかりつけ医ですら、家族のみで定期受診している家庭が多いのが現状である。なおさら、体調が悪い時に気軽に本人を連れて一般の医療機関を受診することは難しい。皮膚炎やアレルギーなどを疑う症状があっても、「痛い」や「痒い」を伝えることができず、イライラして不穏な状態が続き、自傷や他害に発展してしまう。受診のハードルは高く、躊躇している間に受診時期の遅れや症状の悪化につながってしまう。昔のエピソードとして、車を頭突きして壊し、頭が切れて縫合しないといけなような状態であったが、病院へ行くと大暴れして噛みつくなどの他害行為に発展してしまうため、病院受診をあきらめて自然治癒するのを待ったと教えてくれた家族もいた。

そういった家族の思いも理解し、不快な症状は取り除いてあげたいという思いから、病院受診の同行をする場合がある。本人にとって慣れた職員がいるという安心感の中で受診できること、同時に、支援者側は医療機関と連携する機会になることを望んでいる。どのような基礎疾患があるのか、どのような症状があるのかはもちろんのこと、どのような障害特性があるのか、コミュニケーションはどうとるのかなど、普段からよく知っている支援者が医療機関に伝えることで、診察を少しでも円滑に行えたらと考える。

自閉症の人の家族を対象とした調査では、医療受診について困っていると答えた人が6割以上おり、苦慮していることとして、①待ち時間に不穏になる（待ち時間が長い）②暴れる・パニック・自傷・他害（治療や処置に抵抗がある）③わがまま・うるさい（医療者や周囲の言動）が挙げられていた。さらに、上記を理由に医療受診を断られた経験があると答えた人が約4人に1人もいたという結果であった。その理由は、①動いて検査ができない②暴れる③大声や奇声をあげる④症状や訴えがわからないなどが挙げられている。また、医療者（小児科外来看護師）を対象とした調査では、困難とを感じる場面として①暴れることへの不安や恐怖②子どもと保護者両方の対応への不安③実務経験（キャリア）のみでは対応できないといった意見が挙げられていた（野田, 2018）。

【健康診断におけるプレパレーションの導入】

毎年、当センターでは利用者の健康診断を実施している。普段なかなか病院へ行くことが難しい利用者にとって、当センターで受ける健康診断は本人の健康状態を把握するための唯一のもので、家族からの要望も高い。しかし、利用者にとって年に1回しかない健康診断は、積み重ねが難しく、目的を理解することが難しいため、不安や恐怖から、パニックになり大暴れにつながってしまう。その場合、安全確保のため拘束せざるを得なくなってしまう。せっかくの健康維持のためである健康診断を、暴れることなく、拘束されることなく受けられないものだろうかという思いが年々募っていた。

こういった病院受診や健康診断への高い壁を実感する中で、必要な時に必要な医療を受けられないのだろうかという思いが、プレパレーションを導入していくきっかけであった。

「プレパレーション」とは、小児看護の分野で行われているもので、子どもの発達年齢に応じて検査や治療について説明し、本人の力で不安や恐怖を乗り越えることができるようにサポートすることで、子どもが自信をつけて自我を育むことができるようにすることを目的とした概念である。医療分野での取り組みであるが、自閉症支援の基本でもある、視覚支援や見通し支援にも共通するものがある。自閉症の方は、「目の前に存在しないものを取り扱うことの苦手さ」「漠然とした見通し、予定変更、新奇場面の苦手さ」など、想像力の乏しさが特性としてあげられる。そのため、目の前に存在することの視覚的情報があると、わかりやすさが増すとされている。これらの特性を考えると、自閉症や知的障害のある成人の方たちにもプレパレーションを活かされるのではないかと考え、当センターでも取り組みを始めた。

まずは、当センターで年1回行っている健康診断に向けて実施した。

【実施方法と結果】

プレパレーションを進める上で、絵カードなどを使い、利用者一人ひとりが理解しやすい方法で説明を行い、本人が納得して取り組めるようにした。拒否をすれば、本人の気持ちを優先して一旦中止し、挑戦してうまくいけば称賛して、成功体験につなげていくという流れを大切に実施した。

1年目

対象：入所以来、健康診断で採血が全くできなかった利用者1名

道具：手順を示した絵カード（図1）と採血キット（注射器、駆血帯、消毒ガーゼ、テープ）

場所：作業部屋

期間：健康診断の約3週間前から毎日午前10時に実施

方法：個別（看護師と利用者のマンツーマン）

- 手順：①採血の絵カードで予告
②席に座る
③腕を出す
④駆血帯をしぼる
⑤消毒ガーゼで拭く
⑥注射器でさす
⑦動かずにそのまま待つ
⑧注射器を抜く
⑨テープを貼る

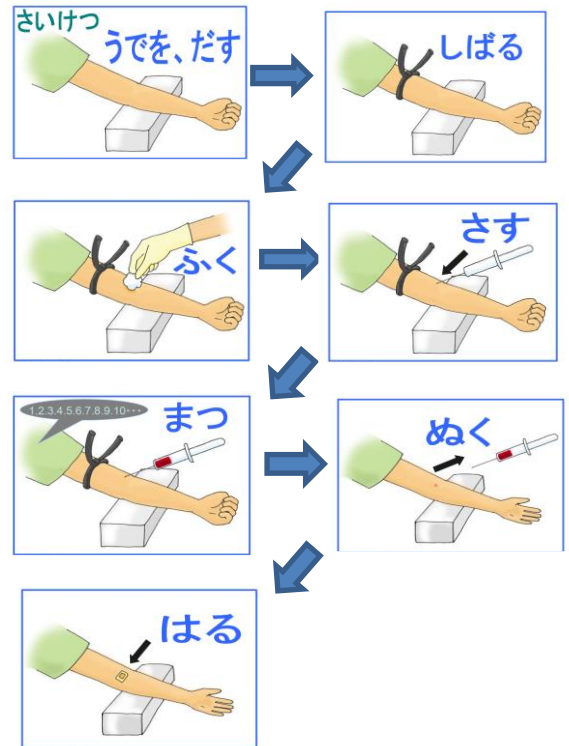


図1. めくり式の絵カード（採血）

プレパレーションと同じ手順で本番も実施したが、採血時に針を見た瞬間から、腕を引っ込めてしまい、何度挑戦してもうまくいかなかった。結果、寝転んで職員数名で拘束し、採血を実施した。

2年目

1年目の結果から、2年目の健康診断に向けて、集団の力を活用したグループダイナミクスの方法を取り入れた。「グループダイナミクス」とは心理学者のクルト・レヴィンによって研究された集団力学のことで、集団において、人の行動や思考は、集団から影響を受け、また、集団に対しても影響を与えるというような集団特性のことを指す。



採血のプレパレーションの様子

対象：これまでの健康診断の受診状況から、落ち着いて受診することが難しかった利用者
7名（1年目のプレパレーションの対象利用者も含む）。

道具：手順を示した絵カード（図1）と採血キット（注射器、駆血帯、消毒、テープ）

期間：健康診断の約1か月前から時間を決めて毎日午後1時に実施

場所：相談室（健康診断当日のイメージに近い環境を設定）

方法：集団で実施。看護師（採血者として白衣を着用）、支援員複数名で対応。

- 手順：①採血の絵カードで予告
②順番待ちの席に座る
③順番がくるまでその席で待つ
④呼ばれたら採血の席に座る
⑤腕を出す
⑥駆血帯をしぼる
⑦消毒ガーゼで拭く
⑧注射器でさす
⑨動かずに10秒待つ
⑩注射器を抜く
⑪テープを貼る



グループダイナミクスを活かしたプレパレーションの様子

2年目の健康診断は、プレパレーションに加え、グループダイナミクスの力を活用した結果、健康診断当日は1年目うまくいかなかった利用者も含め、対象者7名中5名が練習通り問題なく座って採血を受けることができた。当日の採血の際には、人や環境は違っても、できるだけプレパレーションと同じ手順を進めていき、安心感をもって臨めるように努めた。

採血できなかった2名についても、結果的には採血には至らなかったが、プレパレーションの手順を途中まで進めることができた。来年度の健康診断に向けて、引き続き体験を積み重ねていきたい。

【新型コロナウイルスワクチン接種への応用】

2年目の5月の健康診断が終了した後、新型コロナウイルスが流行し、夏前からワクチン接種が受けられるようになった。当センターは通所施設であるため、利用者は各家庭でワクチン接種を受けてもらうことになったが、家族だけでは病院へ行けない3名の利用者には職員が同行することになった。そのメンバーとしては、全員が2年目の健康診断のプレパレーション対象者であったため、健康診断でのプレパレーションの経験を活かし、ワクチン接種においても同じようにプレパレーションを実施して臨むことになった。当センター以外の違った環境である医療機関でも、プレパレーションを実施することでワクチン接種が受けられることを期待した取り組みである。

健康診断同様にグループダイナミクスの効果を取り入れるため、3名の利用者と職員数名が同じ空間でワクチン接種のプレパレーションを行った。

対象：健康診断でもプレパレーションに取り組んだ利用者3名（1年目のプレパレーションの対象利用者も含む）。

道具：手順を示した絵カード（図2）と採血キット（注射器、駆血帯、消毒、テープ）

期間：ワクチン接種の1週間前から毎日午後1時に実施

場所：相談室（診察室のイメージに近い環境を設定）

方法：集団で実施。看護師、支援員複数名で対応。

- 手順：①ワクチン接種の絵カードで予告
②順番待ちの席に座る
③順番がくるまでその席で待つ
④呼ばれたら席に座る
⑤腕を出す
⑥消毒ガーゼで拭く
⑦注射器でさす
⑧動かずに10秒待つ
⑨注射器を抜く
⑩テープを貼る

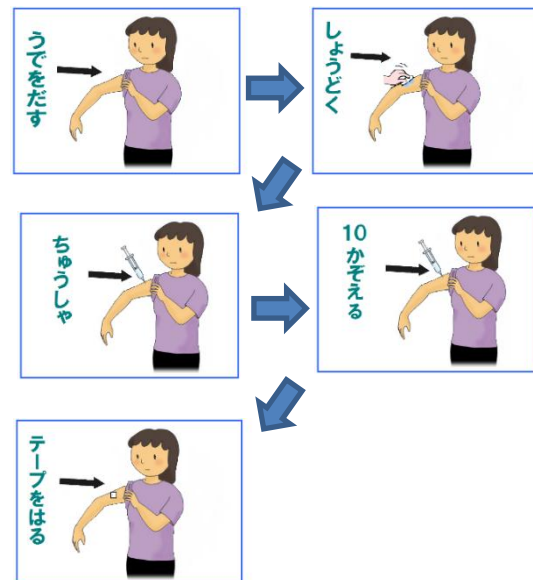


図2. めくり式の絵カード（ワクチン接種）

健康診断から月日が経っていたこともあり、プレパレーション開始日は注射器を見るだけでも逃げ出そうとする利用者もいたが、毎日みんなと繰り返し取り組むことで、少しずつ手順を進めていくことができた。1回目のワクチン接種当日は、医療機関へ行ってからも待合室で絵カードを使ったプレパレーションを実施した。いざワクチン接種になって

も、3名全員が落ち着いて順番に接種することができた。ワクチン接種1回目が終了後も、引き続き3週間後に控えている2回目のワクチン接種に向けて、プレパレーションを継続した。その結果、2回目も医療機関で3名全員が落ち着いてワクチン接種を受けることができた。

それから約6か月後に3回目のワクチン接種の時期となった。対象者は前回と同じ3名であったが、その内の1名については、1回目、2回目の成功体験をさらにステップアップさせ、3回目については、当センターでプレパレーションに取り組み、ワクチン接種当日は家族だけで医療機関の中へ入ってもらうことにした。

プレパレーションの流れは上記と同じで、ワクチン接種の1週間前から毎日3名の利用者と複数の職員で実施した。ワクチン接種当日も13時に当センターでプレパレーションを実施した後、夕方に医療機関へ家族と職員で行った。職員が医療機関の外で最後に絵カードを使って流れを本人と一緒に確認した後、本人と家族だけで医療機関へ入ってもらった。医療機関のスタッフへは前もってプレパレーションの取り組みのことを説明しており、何かあればすぐに連絡してもらうことになっていた。結果としては、本人と家族だけで問題なくワクチン接種を受けることができた。

【考察】

利用者自身の健康維持のためである健康診断を暴れることなく、拘束されることなく受けられないものだろうか、という思いから取り組み始めたプレパレーションである。結果的には2回の健康診断において実施したプレパレーションを経て、多くの利用者が暴れることなく健康診断を受けることができた。

プレパレーションの基本として、これから何が行われるのかを、その利用者が理解できる方法できちんと本人に説明することを大切にした。特に自閉症の方は多くの言葉で説明するより、絵カードや短い言葉で端的に伝える必要がある。今回は、朝礼時の一日のスケジュール提示の中に、採血やワクチン接種のプレパレーションがあるということを伝え、そして、プレパレーションの時間になったらめくり式の絵カードや実物で提示を行った。絵カードや実物による視覚支援により、今から何が行われるのか、本人が理解した上で進められるようにした。手順の途中で抵抗することがあれば、無理はせずその日はそこまで終了して、がんばれたことを称賛し、「明日がんばりましょうね」と次へつなげた。なんとかがんばって乗り越えられた時は、みんなで喜び、本人ががんばったという成功体験を味わえることを大切にした。初めは座って待つことも難しい利用者もいたが、毎日同じ時間に同じ環境でプレパレーションを続けたことで、少しずつ手順をクリアしていくことができた。

また、1年目と2年目の大きな違いは、プレパレーションの実施が個別か集団かである。1年目は個別で職員と利用者がマンツーマンで、プレパレーションを行った。2年目は同じ空間に利用者が集まり、集団で順番にプレパレーションを行った。他の利用者が採血を受けている場面を見て、今から何が行われるのか、自分の順番がいつくるのかがわかりやすく、見通しを持って臨めたことがあげられる。つまり、集団の力を活かしたグループダイナミクスの取り組みであるといえる。

さらに、1年目と2年目の違いで、職員側の要因もあった。1年目は看護師が主に実施しており、全体で行うというよりは、支援員が作業や活動プログラムを提供している間に、看護師がプレパレーションを行っていた。2年目はグループダイナミクスを意識して、職員全体で取り組んだ。プレパレーションの時間をプログラム化して、利用者と職員全員で参加し、利用者の観察や様子の記録など、役割分担をして情報共有も行った。それが本番でも、利用者にむける言葉がけなどに反映されていたのではないかと思う。利用者だけでなく、職員も含めたグループダイナミクスの効果があったのではないかと考える。

また、プレパレーションの取り組みをワクチン接種にも取り入れた結果、3回目のワクチン接種まで問題なく受けることができた。新型コロナウイルスの流行とともに、家族からは「かかりつけ医がないからどこへ行ったらいいのかわからない」「集団接種会場なんて連れて行けない」など、ワクチン接種に対する不安の声が多くあった。それ以上に新型コロナウイルスに罹患した時の「隔離ができない」「家族が罹ったらだれが本人をみてるのか」「一家で罹るしかない」といったあきらめに近い不安を訴えられる家族の方たちがいた。罹患しないよう、罹患しても軽症で済ませるためにも、ワクチン接種は必須であった。新型コロナワクチン接種という急遽目の前に立ちはだかった課題に、健康診断のプレパレーションの経験が活かされたことは、地道にプレパレーションに取り組んできてよかったと思えた瞬間であった。

【まとめ】

プレパレーションという医療現場での取り組みや考え方が福祉の現場につながったのは、自閉症支援に取り組んでいる福祉現場の看護師ならではの視点である。プレパレーションは小児看護分野での取り組みであるが、普段私たちが行っている自閉症支援の基本である視覚支援、構造化支援、見通し支援、成功体験の積み重ねなど共通することがたくさんある。取り組みの名称は何であれ、本人が納得して課題に挑戦し、それが成功へつながり自尊心が高まる、そんな支援を大切にしている。失敗を繰り返しながらも少しずつステップアップし、課題を乗り越えていくことで本人の自信や達成感となっている。それは医療や福祉に限らず、本人が充実した生活を送る上でとても大切なことである。

小児看護以外の医療分野では、まだまだプレパレーションの取り組みの認知度は低く、特に障害児者を対象としたプレパレーションとしての統一された方法は確立していない。また、医療現場においては自閉症についての理解も限定的で、受診時の配慮については、なかなか進んでいないのが現状である。自閉症の人の特性に応じた、どのような支援があれば受診がスムーズにいくのかということ、根気強く医療現場へ伝えていくことが、自閉症理解、強度行動障害理解へとつながるのだろう。福祉と医療をつなぐ大切な役割となっているのが、福祉現場の看護師の存在であると思う。

今回の取り組みは、通い慣れた施設内での健康診断から始まり、ワクチン接種を施設外の医療機関で受ける、しかも職員が同行しなくても家族だけでも医療機関へ行ってワクチン接種を受けることができたという成功体験の積み重ねとなった。これまでは、1年に1回の健康診断での採血が課題であったが、この年は採血に加えて、3回のワクチン接種というさらなる大きな課題となって降りかかったが、プレパレーションを続けて取り組み、

みんなの力で乗り越えることができた。この成功体験は今後の利用者の人生にとって、大きな自信につながったと感じている。こういった地道な取り組みが、医療機関における診察や未経験の検査を乗り越えていける力につながっていくと信じている。

時間はかかるかもしれないが、これら一つ一つの取り組みが、障害がある人の地域医療へとつながり、長い成人期において、利用者一人ひとりの地域生活の充実につながっていくことを期待している。

※健康診断や病院受診の際に、安全確保のため拘束する場合は、事前に本人と家族にその旨を同意いただいた上で実施しています。

- 1) 令和元年度強度行動障害支援者養成研修指導者研修テキスト
- 2) 野田孝子, 知的障害児者の理解—医療現場での配慮—, 2018, 平成 30 年度リハビリテーション看護研修会
- 3) 医療サポート絵カード, 社会福祉法人大阪知的障害者育成会